

健康文化

お師匠さま

今井田 二三子

二十数年前、これから先長く続けることのできる稽古事に茶の湯をと思い、女学校時代の先生の紹介でお師匠さまをお訪ねしたのが最初の出会いでした。何の予備知識も持たないで訪問した私は、弟子として入門をお願いするのに、少しためらいはありましたが表玄関より入りました。あらかじめ電話でお伺いする日時はおききしておりましたが「ごめんください」と訪れを乞う私の言葉の終わると同時に玄関の障子がサラリと開き、お師匠さま自ら出迎えて下さいました。人の出迎えの心を最初に教えていただいたと思いました。その時の総てを包みこむような温かい笑顔は今もありありと目に浮かびます。一言も言葉を交わさないうちに、玄関のタタキの上の自分が小さくなってゆくような気がしました。

人の前に出て自分を小さく感じたのは、後にも先にもなく、この時が初めてでした。

無事入門することになりました私は、なかば恐れのお気持ちを抱きながら週一回稽古に通うことになりました。時々土曜日の夜の稽古のあとなど、帰りを急がない弟子達は何時の間にかお師匠さまの傍らに集まり、茶道の心くばり、また人間としての生き方、生きざまについてのお話を、お聴きすることがありました。言葉はその人を表すと言われるように、お師匠さまのお話は限りなく透明で、限りなく温かく、また限りなく厳しいものがあり生命のほとぼしり出るような威力と迫力を感じました。通い始めて半年ほど経たある夜、お話の途中で「誰か台所の蜜柑を持ってくるように」とお命じになり、入口近くの私を取りに立ち、籠に持ってさし出しましたところ、突然「あなただったらこの中の蜜柑のどれを取るか」と私に問いかけられました。虚をつかれた私は日頃の自分のありのまま、「大きいのをとります」とお答えしたところ、次の瞬間、天地が裂けるかと思われるほどのお叱りをうけました。私自身が粉々になって吹き飛んでしまいそうなすぎましきでした。

各自の心の中にある佛心を磨き、その心に照らして己を観る、そのためには先ず法を聴き間違いのない己をつくること、それが修行であり、その自分で行

いをするようにと日頃からお話になられるお師匠様の当然のお叱りでありましたが、それに素直に納得できる私になるまでは暫く声もかけていただけませんでした。本当に自分の心を恥じる心境になり、それをお伝えしたとき微笑し、うなずいていただけました。やっと弟子になれたと、その時、自分で感じました。

また或る時、茶席で数人の客の中の一人を稽古しておりましたとき、その朝生けられた床の間の野ぼたん（本当の名前はわかりません）の紫の花弁がハラリとこぼれおちました。床脇で弟子の点前（てまえ）をみていらっしやいましたお師匠さまの手がスーッと伸びてその花弁を掬いあげられました、すると弟子の一人がスッと進み出てその花を手を重ねて受けとり茶席の外へ消えてゆきました。亭主をつとめる弟子の一人は何事もなかったかのようにサラサラと茶を点（た）て、客の一人は野ぼたんの散り際のあざやかさを称え、しかも茶室の空気は少しも動かなかったような気がしました。動いたのは私の心の中だけだったように感じました。

“我が道遥かなり” 帰路私は心の中で言いました。

お師匠さまの厳しい言行一致の生きられ方に接し、またそれを感じる度毎に、自分の修める道の遥けさ痛感しました。

“坐するところ真なり” 常に全身全霊で瞬時、事に当たるようにと語られるお師匠さまは、心の抜けた挨拶を申し上げようものなら「今日は稽古をするに及ばない、帰りなさい」といわれます。

あるときは慈母観音のような目ざしを私達に向けられ、あるときは呵々大笑され、またあるときは落雷を感じるような叱咤を発せられるお師匠様に弟子の一人一人に対する深い情を感じておりました。

あるときお師匠様のお座りになっていらっしやいます周囲がほのかに明るく感じたことがあり、まばたきをして見直してもまだ明るく感じました。その時私は釈迦像の頭上の光輪の意味が理解できたように思いました。

今まで画家の気持ちの上の創作だと思っていましたが、弟子の何人かは、それを見、それを感じられていたのだと気づきました。

お師匠様がお亡くなりになられて二年たちました今も、あるときは柔和な微笑で、またあるときは厳しいお顔で私の夢の中に出てこられます。その時、私は何時もお点前の準備に手間どっていたり、何かの手ぬきをしていることが多く、ハッと目覚めて今の心のゆるみを深く反省しております。

（内科開業医）